全カリ Newsletter No. 50
2021.6.25
立教大学全学共通カリキュラム運営センター

2021年度の全カリ　―抱負と展望―

全学共通カリキュラム運営センター部長　井川 充雄

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の蔓延を受け、2020年度は、春学期、秋学期を通じて、ほぼ全ての科目をオンラインで実施せざるを得なかったが、2021年度は、対面授業を限定的に再開することとなった。とりわけ1年次生の大学への着地を確実に行うため、部長会での再三の議論を経て、言語系科目においては、英語のディスカッション・ディベート・プレゼンテーション、言語B必修クラス、それに自由科目の一部を対面で行うこととした。また、総合系科目では、主として1年次生が履修する「学びの精神」科目、少人数の演習科目、それにスポーツなどの実習科目を対面授業で行うこととした。それ以外の科目は、昨年に続き、オンラインとなった。このように本年度は、対面授業とオンライン授業が併存することとなった。また、対面授業を行うクラスにおいても、既往症や罹患等により入構できない学生や、海外にいて未入国の学生が受講できるように「ミックス型」授業も取り入れることとした。これらの工夫により、コロナ禍における「学びの場」を確保することが可能となった。こうした対応は、科目担当者の全面的な協力、それをバックアップする職員の多大なる尽力なくしては成り立たない。すべての教職員に対して、まずお礼を申し上げたい。

ただ、こうした努力にも関わらず、感染状況の悪化にともない、本学では4月29日からは原則オンライン授業とせざるを得なかった。今後も感染状況を見ながら、授業形態を変更するという難しい舵取りが求められている。

そうした目前の対応だけでなく、本年度の全カリにはさまざまな課題がある。主なものをあげれば以下の通りである。

言語系科目においては、2024年度の新カリキュラム実施に向け、準備を加速化していかなくてはならない。一足先に方向性が決まった英語においてはCLILのパイロット実施・検証を行う。また、言語Bについては、春学期中には新カリの構想を全カリ委員会でご議論頂く予定である。いずれも、これまで以上にコミュニカティブな授業内容、きめ細かい指導を目指している。

総合系科目においては、全学のグローバル化の方針に沿って、F科目（外国語によって教授される科目）の増設をはかるとともに、履修者を増やすための方策を検討する。また、企画提案型科目についても、これまでの科目展開のあり方を検証するとともに、今後のあり方の検討を開始する。

両者にまたがるものとしては、グローバル教養副専攻の一層の充実化をはかっていくという大きな課題がある。これまでたびたび指摘されてきたが、登録者・修了者数は、期待通りには伸びていない。このため、コースの充実をはかるとともに、学生が履修しやすい仕組みの構築をさらに進める。また、優秀な留学生獲得のために本学が新たに始めるPEACEならびにNEXUS Projectにおける全学共通科目のあり方を検討するとともに、英語で修了できるコースづくりも課題となっている。

今回の新型コロナウイルス感染症の蔓延は、おそらく人類史上に残るものであろう。そのため、大学教育のあり方そのものも、今まさに大きな転換点を迎えている。昨年度のオンライン授業への移行は、緊急避難的な措置であったが、その経験から私たちはオンラインを活用した授業のメリットや可能性にも気がついた。オンライン授業の利点を活かし、対面授業とオンラインを有機的に組み合わせることでさらに大学教育の充実をはかることができよう。そうした長期的な視点から、将来を見据えた検討も、今、求められている。

いずれにせよ、全カリは、立教大学の全ての学部の協力のうえに成り立っている。立教大学の全ての教職員の皆さんのご協力・ご尽力に感謝申し上げるとともに、今後もますますのご協力をお願いする次第である。

２０２１年度全カリ新役職者からのご挨拶

２０２１年４月に言語チームリーダー、総合チームリーダー、英語教育研究室主任、諸言語教育研究室主任、総合チームメンバー（３名）が新たに就任されました。全カリ部長や副部長とともに、全カリという大きな運営体を支えていきます。

言語チームリーダーに就任して

松本 旬子（全学共通カリキュラム運営センター言語チームリーダー／外国語教育研究センター准教授）

２０２１年度より言語チームリーダーに就任いたしました、松本旬子と申します。２０２０年度より奉職したばかりで学内の一連の流れもまだまだ掴み切れぬ中、オンライン・対面・ミックス型といった有事の授業展開に直面し、研究室運営にも腐心する日々が続いております。この重責を果たすことができるのか、甚だ恐縮ではございますが、全力を尽くして取り組んでまいりますので、よろしくお願いいたします。

新型コロナウイルス感染拡大防止のため２０２０年度の全カリ言語の授業はすべてオンラインで行われましたが、２０２１年度は新入生への大学の着地を重要視し、本学では言語Aの一部と言語Bの必修科目を対面で開始しました（４月末現在、緊急事態宣言の発令に伴いオンライン授業に移行中ですが）。その準備と対応に追われ、各言語教育研究室では昨年度以上に多忙な年度始めとなりました。私の所属するスペイン語教育研究室も例外ではなく、バタバタと過ごしている間に就任の日を迎えてしまいました。前チームリーダーの細井尚子先生（異文化コミュニケーション学部教授）が最後の最後まで精力的にリーダーシップを発揮してくださりましたので、しっかりとバトンを受け取って邁進してまいりたいと思います。

目下最大の課題は、２０２４年度から始動する言語B新カリキュラムの開発と準備です。英語＋１言語の学習は、本学が育成を目指す新しいグローバルリーダー、専門性に立つグローバル教養人に必要な資質の基盤となります。とりわけ、新カリキュラムの根幹に位置付けている複言語主義に基づく教育を実践することで、複数言語・複数文化を受容する感性・好奇心・共感の態度を持った学生を輩出していきたいと考えています。本学では国内でも珍しく言語B科目として日本手話の授業を行っています。非常に人気の高い授業です。このような既存の特長を活かしつつ、多様な学生の目標やニーズ、成長に合わせた授業運営・科目展開を予定しています。

幼稚園から高校まで東洋英和女学院で育ちました。何かを変えたく、また自分自身も変わりたく、高校時代にボリビアへ交換留学したのがスペイン語との付き合いの始まりです。青山学院大学・大学院を卒業した後はサラリーマンをしていた時代もあります。その後スペインへの留学を経て、清泉女子大学大学院で学び終えたと同時に大学でスペイン語を教え始めました。少々遠回りをしてスペイン語教員となったことも、15年さまざまな大学で教鞭をとってきたことも、25年一学習者としてスペイン語を学び続けていることも、すべて立教生のために活かしていきたいと思っています。

総合チームリーダーに就任して

後藤 雅知（全学共通カリキュラム運営センター総合チームリーダー／文学部教授）

４月から総合チームリーダーを務めております後藤です。これまで全カリ科目を担当したことは二度しかなく、かつ講義科目を担当したのは、そのうちの一度です。その際は試行錯誤的に新しい内容を話してみた

のですが、アンケート結果で、内容が難しいし、板書など説明も分かりにくいという意見と、立教大学に入学してからもっとも充実した授業であったという意見と、両極端な評価を受け、説明の方法や難易度の設定などに悩まされた記憶があります。近世日本の身分社会の捉え方、あるいはその実態について話したのですが、次回、同じような内容を話す機会があれば、前回の反省を踏まえようと思っています。このときは、セントポールプラザでのテキスト販売が混乱したタイミングでもあったため、学生にはいろいろ迷惑をかけたようです。

一方全カリの運営に関しては、2015年度から三年間、総合チームメンバーを務めたことがあります。最初にメンバーとして会議に出席した頃のチームリーダーは経済学部の中島俊克先生（名誉教授）で、総合系科目の隅々の至るところまで理解している中島先生が、会議を淡々と進められた姿が印象に強く残っています。その安定的運営を目の前に、自分でも全カリの運営が分かったような気になっていました。もちろんそれは妄想に過ぎず、単に人文系科目の細部に関わっただけで、まったく想像もしなかった総合チームリーダーの役割が自分にまわってきて、いまはその関わるべき範囲の広さに戸惑うばかりの毎日です。

そのようななかで、「外国語による総合系科目」、いわゆるＦ科目の開講数を、2023年度までに総合系科目全体の20％程度にまで増設することが、喫緊の課題となっています。またそれに連動しつつ、立教ゼミナール発展編をどのように改変するか（しないか）などの課題も残されたままです。あわせて昨年度に続き、新型コロナウイルスの感染拡大に対応する必要があり、当分は授業方法の模索も続くものと思います。全カリサポーター制度も活用させていただきながら、履修学生が満足できることを第一に考え、立教大学のリベラルアーツ教育を支える全カリの充実に努めていきたいと考えています。

英語教育研究室主任に就任して

三浦 愛香（英語教育研究室主任／外国語教育研究センター准教授）

本年度より英語教育研究室主任に就任いたしました三浦愛香と申します。2019年度に外国語教育研究センター（FLER）準備室に着任し、(旧）英語ディスカッション教育センターの副センター長も務めました。また、FLER設置準備室や英語教育研究室の業務を通して、本学の外国語教育の運営だけでなく、2020年度のFLER設立にも携わる機会を得ることができました。

私の研究分野は、学習者コーパス（学習者の発話を収集したデータベース）を用いた日本人英語学習者による第二言語習得です。特に、ポライトネス（場面に応じて社会的に適切な表現を使っているか）の観点から発話を検証する語用論という分野に関心があります。本学では、教育や指導の場だけでなく、英語教育研究室が担う教務においても日英両言語で携わることが多く、異なる言語や文化的背景を持つ方々と円滑なコミュニケーションを取ることの難しさを時に感じつつ、英語学習者の一人としても学びの多い日々を過ごしています。

先日の１年次生の授業で、立教大学について英語で一言述べてみようというタスクを学生に与えたところ、Rikkyo University offers a lot of opportunities for intercultural communication. という回答がありました。コロナ禍で留学生の受け入れや海外留学の実現が難しくなり、オンライン授業を余儀なくされているにも関わらず、このような回答を得られる本学の教育環境は大変貴重であるといっても過言ではないでしょう。

立教大学は、最先端の英語教育を実現している大学として国内でも知名度が高く、一般の方々やマスコミだけではなく、各地でさまざまな英語教育に携わる方々が本学の英語教育の動向を注目しています。例えば、１年次生の必修科目の英語ディスカッションの授業は、定員10名の少人数制ですが、本授業を実現する上で必要とされる教室環境の整備と科目担当者の配当は、大学の運営としても容易なことではありません。さらに、インハウスで出版された習熟度別の教科書、学習到達目標を実現するため段階的に工夫されたシラバス、そ

して、きめ細かな教授用書が準備されており、英語教育研究室において長年培われた英語教育の見地、それを現場で実現して下さる科目担当者の先生方、その舞台裏を支える教務事務センターや全カリ事務室の皆さんのご尽力に感服せざるを得ません。学生らが確実に言語能力を上達させ自信をつけ成長していく姿に触れることができ、一教員としてもrewardingな（やりがいのある）日々です。微力ながらも、「縁の下の力持ち」として、本学の英語教育に貢献いたしたく努力してまいります。

諸言語教育研究室主任に就任して

関 未玲（諸言語教育研究室主任／外国語教育研究センター准教授）

２０２１年度より諸言語教育研究室主任に就任しました、関未玲です。専門はフランス語教育･フランス文学･フランス語圏文学で、２０２０年度に開設されました外国語教育研究センターに、開設と同時に着任しました。嵐のなかの船出となった昨年、立教着任と同時にフランス語教育研究室主任となりました。フランス語教育研究室の先生方に支えていただきながら、連日コロナ禍で山積する課題をこなしてゆく一年となりました。そして二年目となる今年度より、諸言語教育研究室主任を兼務することになりました。本来なら、フランス文豪が愛してやまないドストエフスキーをわずかでも読めるように自身でもロシア語を勉強し、ポルトガル語でフェルナンド・ペソアの詩に触れ、学生時代に朝日カルチャーセンターで学んだ日本手話（ちなみに世界初のろう学校はパリで創立されました）を改めて学び直しながら､全カリの充実した言語教育を自ら体感し、その経験を通して諸言語教育研究室をどのように発展させ、先生方をサポートすることができるのか、考える好機でした。しかしまさにこの原稿を執筆するさなかに､対面からオンライン授業への移行が決定しました。ロシア語、ポルトガル語、日本手話の先生方とは挨拶もままならないまま、事務的なメールが続き、歯がゆく、また申し訳ないばかりです。

現在、言語Bでは２０２４年度の新カリキュラム導入に向けて、改革の準備が進められています。必修言語のロシア語についてはもちろん、ポルトガル語や日本手話についても新カリキュラムの構想を踏まえた検討を行っていく予定です。ロシア語については、立教でのロシア語教授歴20年に及ぶ深澤洋子先生にまとめ役になっていただき、今年度から池袋と新座の両キャンパスで計８学部を対象とする必修クラス体制がスタートしました。ポルトガル語は、自由科目として授業が展開されており、幅広いレベルの受講生に対応した授業を運営していただいています。日本手話の授業は２０１０年度にスタートしましたが、応募者が定員を大幅に上回る状況が続いており、継続学習者も非常に多いことから、今年度開講クラス数を増やしました。ワンチームとして日本手話の先生方に連携していただき、クラス数の増加にもご対応いただいております。全カリで展開する言語数は、言語Aである英語も含め９言語にのぼります。一フランス語教員としては、一つの言語を極めることも重要だと常々思っておりますが、他方で幅広く多言語に接する機会というのは、若いうちならではの貴重な経験だと思います。ぜひ、９言語を相対的に学べるリレー講義のような授業が、２０２４年度にスタートする新カリキュラムで展開できるよう取り組んでゆければと思っております。どうぞ宜しくお願い申し上げます。

「歴史学への招待」から「歴史への扉」へ

上田 信（総合チームメンバー／文学部教授）

このたび、総合チームのメンバーに加わった。科目のタイトルをめぐる想いを記すことで挨拶に替えたいと思う。

タイトルに掲げた科目名は、この春学期に私が担当している同一授業に冠されたもの。前者はカリキュラム（2012〜2015年度入学者に適用）の科目名、後者は現行カリキュラム（2016年度以降入学者に適用）の科目名。実は「歴史学への招待」という科目名は私が提案したもので、当初から評判が悪かった。この科目名だと、文学部の史学科、あるいは経済学部で経済史を専攻している教員だけしか担当できなくなり、全学共通という理念に反するというのだ。その批判はもっともなことだろう。

「歴史は学ぶものではない。みなさんが明日にむけてよりよい一歩を踏み出すために、歴史を編むことが求められている」と授業で語っている。歴史学者が「招待する」という旧科目名を提案したときとは、考え方が大きく変わったのだ。学生から授業の目的を問われて「この授業では歴史を教えません。みなさんに歴史するきっかけを造るだけです」と応えている。

いまを生き抜くためには、目の前にある現実の歴史的な背景を、過去にさかのぼって知る必要がある。過去の出来事そのものは存在していないのだけれど、過去の出来事の痕跡は、史料や伝承、遺物などのかたちで、現実のなかに散在している。「歴史する」とは、これらの痕跡が指し示している過去の出来事を、整合的に説明することだ。その際に、自分が抱いている過去のイメージや、過去に関する仮説と矛盾する痕跡を、けっして無視したり抹殺したりしてはいけない。

歴史概論では、しばしばE.H.カー『歴史とは何か』を取り上げて、清水幾太郎の訳文「歴史とは歴史家と事実との間の相互作用の不断の過程であり、現在と過去との間のつきることを知らない対話なのであります」という言葉を紹介する。この言説は批判しなければならない。歴史は歴史家が創るものではない。「歴史を歴史家から取り戻す」のだ。カーの原文では、

> What is History? My first answer therefore to the question, is that it is a continuous process of interaction between the historian and his facts, an unending dialogue between the present and the past.

とある。訳文には現れていないhis factsという言葉にも、警戒すべきだ。歴史家にfacts（諸事実）を占有させてはならない。みなさん自身で過去の事実を、その根拠となっている痕跡にさかのぼって検討を加え、未来を切り開くために歴史を再構築する必要があるのだ、と語るようにしている。

今年度、私が担当する「歴史学への招待」のわずかに１名となった履修者が、科目名に惑わされないように配慮しながら、授業をいまも続けている。

総合チームメンバーに就任して

前田 泰樹（総合チームメンバー／社会学部教授）

私は、質的研究法と保健・医療の社会学の教員として、３年前に本学社会学部に着任いたしました。専門の研究は、医療従事者はどのようなケアの実践をおこなっているのか、また、病いを生きる当事者はどのような経験をしているのか、といった問いに対して、エスノメソドロジー（人々の方法論）と呼ばれる質的研究法の考え方を中心として、答えていくものです。

現在は、主として２つの調査を中心に研究をすすめております。一つは、遺伝性疾患を生きる人々の経験を、

当事者と医療者とのインタビューから明らかにしてきました。もう一つは、急性期病院においてフィールドワークを行い、ビデオデータの分析などを通じて、看護師たちが患者へのケアを行う協働実践の方法を明らかにしてきました。とはいえ、昨年度は、COVID-19対応のために、十分に調査ができませんでした。そのかわりに、感染症や公衆衛生について関わったことはあまりないのに、不勉強ながらCOVID-19対応関連について考えさせられる機会もありました。

こうした研究をしているため、医療従事者や看護や福祉の研究者と対話する機会も多いです。また、方法論的な観点からは、哲学者、人類学者、言語学者などの異分野の方たちと議論する機会もあります。また、本学に着任する前の職場では、全学の教養教育を担当する部署にも所属しておりましたこともあり、着任初年度から総合系科目を担当させていただきました。『学びの場としての社会』では、「出生」「教える／学ぶ」「働く」「家族・結婚」「病い・老い」「死」といった人生において経験しうる出来事をトピックとして、隣接諸科学との関係を意識しながら、全学の学生向けに社会学の入門を行う、という主旨の講義を行いました。

以上のような経歴から、全学教養教育に対する心理的な垣根は低く、なじみやすいところもあるとは思います。とはいえ、なにぶん着任してからまだ日が浅く、本学の歴史やリベラルアーツの伝統についての理解が浅いところがあるかと存じます。他大学と比較しても、本学の教育全体において、全カリは、非常に大きな位置を占めているように感じます。まずはその歴史を学ぶことから始めさせていただき、わずかながらでも全カリの運営に貢献できるように努めたいと思います。今後ともご指導よろしくお願いいたします。

総合チームメンバーに就任して

眞島 恵介（総合チームメンバー／理学部教授）

このたび、総合系科目構想・運営チームメンバーになりました眞島恵介です。どうぞよろしくおねがいします。私は当初理学部・化学科に着任しました。その後、化学科・生命理学コース、更に生命理学科の設立に関わり、現在は生命理学科に所属しています。生命理学コースの設立時期は、確か全カリが作られた時期とほぼ同じだったと思います。当時は一般教養部から理学部へ分属された先生が全カリの運営などに携わっていましたので、私は全カリの授業は担当した経験はありましたが、全カリの運営に関わることはほとんどありませんでした。今回、総合構想・運営チームメンバーとなり改めて全カリの組織などを見てみると、発足当時から幾度かのカリキュラム改革を経てさまざまな側面を持つ組織になっていることを再認識させられました。長く立教大学に在籍していますが、全カリの運営などに関わることが少なかった私が、チームメンバーとしてどのくらい貢献できるか心配ですが、少しでも力になれるように努力したいと思います。

自分の大学時代を振り返ってみると、私は一般教養科目には余り熱心な学生ではありませんでした。狭い専門分野しか勉強しなかった私は、その後の人生経験の中で自分の知らない分野・世界がたくさんあることに気付き、自分がいかに専門分野だけの狭い世界しか知らない人間だったかを気付かされました。今から思うと大学時代の一般教養科目はさまざまな分野があり、今まで自分が知らなかったさまざまな分野を学ぶことができるチャンスを与えてくれていたのだと思うと、もっと一般教養科目を大事にして受講していたらと後悔しています。今、自分が教える立場で学生を見ていると、かつての私と同様に本学の一般教養を担う全学共通科目を軽視している学生がいますが、狭い世界しか知らないと広い視野で考えることができません。さまざまな分野・世界を知るための第一歩として、全カリの多様な科目を積極的に履修出来るように何らかの形で貢献できたらと思っています。

グローバル教養副専攻からのお知らせ

グローバル教養副専攻は、学部学科や専修で身に付ける専門性に加えて、専門以外の分野を１つのテーマに沿って学ぶことで、多面的に物事を捉え、持続的に考える能力を養成する制度です。

対象となる学生（全学部１～４年次生）には、グローバル教養副専攻に本登録のうえ修了を目指して科目を履修していくことを推奨しており、より多くの学生への積極的な周知にご協力をお願いいたします。

■グローバル教養副専攻のコースとテーマ（２０２１年度）

コース	Arts & Science Course	Language & Culture Course	Discipline Course
概要	**幅広い知識と教養、総合的な判断力を養うコース**	**多文化理解や外国語を身に着ける力を養うコース**	**学部や学内諸機関の提供科目を中心に構成するコース**
テーマ	・Global Humanity ・Global Social Experience ・Global Art Experience ・Global Mind ・Global Studies of Nature and Environment ・Global Citizenship ・Global Sports ・Global Studies of Region	・Academic Studies in English ・World Issues in English ・Communication in English ・German Language & Culture ・French Language & Culture ・Spanish Language & Hispanic Culture ・Chinese Language & Culture ・Korean Language & Culture	・Teaching Japanese as a Foreign Language（日本語教育学） ・Data Science（データサイエンス） ・Experience Opportunities in Japan for International Students（留学生向けキャリアと日本語） ・International Cooperation（国際協力人材育成） ・Global Leadership（立教GLP）

＊学生は上記のコース・テーマから１つを選択します。

■グローバル教養副専攻の特長

メリットを感じる部分は個々人で異なるかと思いますが、本登録している学生の声も踏まえて、以下４点を挙げさせていただきます。

①体系的な学び

グローバル教養副専攻の枠組みに沿って履修することで､興味のあるテーマを「体系的に」学ぶことができます。興味はあってもあまり知見のない分野を我流で学ぼうとすると、偏りが出やすくなったり、ともすれば虫食いのような学び方になってしまう可能性もあります。専門以外の分野だからこそ、広く、深く、偏りなく学びを進めるための「道しるべ」として、グローバル教養副専攻を活用いただきたいと思います。

②思いもよらない出会い

実際に本登録している学生から、「副専攻に登録していなければ受けることのなかった科目を履修し、視野が広がった」という声を頂いています。既存の視野では見逃していたかもしれない、「予想外の学びとの出会い（セレンディピティ）」を通じて、学生の視野と可能性がさらに広がることを期待しています。

③自分だけの経験

「学部の専門性」×「副専攻のテーマ」×「海外体験」の掛け合わせによって得られる経験は、どこにでもある「コモディティーな経験」ではなく、自分だけの「オリジナルな経験」になるはずです。まったく同じ掛け合わせの人を見つける方が難しいでしょう。そのような自分だけの経験が､人とは違うオリジナリティーを磨いたり、内在的な興味関心を見つめ直す一助になればと思います。

④大学からの公式証明

副専攻を修了した学生には、「立教大学が公式に発行する修了証」を卒業時に授与しています。

■登録方法

学生はグローバル教養副専攻Webサイトの「各種手続き」から、副専攻システムにアクセスして希望のコース・テーマを簡単に本登録できます。

＜グローバル教養副専攻Webサイト＞

■海外体験について

グローバル教養副専攻の各コース・テーマでは海外体験を必須としています。海外体験の認定要件はグローバル教養副専攻Webサイトをご覧ください。なお、新型コロナウイルスの感染拡大による海外プログラムの実施延期・中止等に伴い、2021年度もオンラインによる海外体験が認められることとなりました。

【2021年度オンラインによる海外体験認定基準（特別措置）】

従来の（A）立教大学が実施する海外プログラム、（B）自主企画に加えて、2021年度（2021年4月1日～2022年3月31日）に実施される以下の（C）、（D）のプログラムを海外体験として認定します。

（C）	内容	立教大学が主催するオンラインによる海外プログラム
	時間数	【正課】…時間数は問わない【正課外】…総時間数が45時間以上＊
（D）	内容	海外の大学や教育機関が行うオンライン留学プログラムや、企業や団体が行うオンライン海外プログラム・インターンシップ等
	時間数	総時間数が45時間以上＊

＊プログラム時間数は自主学習時間を含めない。また、（C）（D）複数のプログラムを合算して45時間以上でも可。

➢　グローバル教養副専攻の詳細はWebサイトをご確認ください。
https://spirit.rikkyo.ac.jp/rmp/Pages/default.aspx

全カリニュースレター　No.50
発　行　2021.6.25
発行人　井川 充雄
編集人　立教大学 全学共通カリキュラム事務室
発行所　立教大学 全学共通カリキュラム運営センター